

*

格別に報せるほどのこともないまま、間があいてしまった。お詫びする。

4月半ば、「言語研究会」の3回目のお集まりがあり、メンバーの諸氏といろいろ突込んだ話し合いになったが、そのときわたしの心算にありながら十分に語りきれなかった部分がある。ここでもう、いっそうの明るみにもたらすべく、意を尽くしてみたい。(こうした事柄をこの紙面で論じるのは、場ちがいなのかもわからないが、そこに普遍的な問題がかくれていると思えばこそ、敢えてここでのべることにする。だから、この話は、「言語研」のことなどを抜きにして、読んでいただきたい。)

今年度の「言語研究会」は、おそらく厳しいところにさしかかることになる——そう、わたしはみている。これは多分、当然の推移のなせるところであるのだ。

この研究会は、どのようにして始まったのか？ それは、しばしば相互確認してきたように、言語(なり、コミュニケーションなり)にとりわけ注目するところから、社会のなりたちを考えたおしていき、という1点だけを、共通の了解事項とするところから、出発していた。このように、なにかある特定の興味や関心を核として研究者らが集まった、といういみでは、他のなべての研究会と、向ひとつ変わるころがない。ただもし変わるころありとすれば、こうした素朴な自意の重なるころとなった。言語という主題領域が、やゝ特殊であること——つまり、既存の視角のなかでは、従来とすれば等閑視され、むしろ周縁的な社会事象と見做されるような主題領域であった、という事情であろう。こうした既存の視角からみれば、言語(やコミュニケーション)に対して何人もの社会研究者の課題意識が集中して注がれるなど、全く意外のこと——単に理解できないというよりも、不快な、あるいは不健全なことだ、と映るにちがいない。それには、もっともなところがある。しかし、わたしの

見解では、いまさらからぬ研究者が「言語」に注目するにすれば、そこには、それ相応の理由と時代の命ずる必然がある、と考える方がよいのだ。その点では、わたしの自信も、ないではない。(そう考えればこそ、「言語」派注会誌の一翼を担うものとして、わたしの「記号空間論」を創作しつつあるわけだ。)——というわけで、この研究会の誕生の蔭には、社会(科)学(世)界におけるパラダイムの硬直と亀裂が、どこかに遠くみえかくれしていたのである。

ここまでは、わかり切った話である。わたしが自我をこめて語りたのは、その先だ。

たとえは言語に着目してみせるぐらいなら、誰にだってできる。そんなことは、いたって簡単だ。だから、別段、血ほどのことでもない。ひけらかすときに値打ちがあるわけではなく、成就したときにはじめて重みをもつのが、問題意識というものであるにちがいない。だから、ある着眼は、決して自己カタルシスの終着点ではなくて、自己仮設の検証のための戦略的橋頭堡である。ある着眼にあえてこだわるのなら、その着眼からいったい何がひきだせるのか、何がひきだせないのか、自他に明らかとなるまで、とことんその着眼を敷衍してみせる以外にならう。(さもなければ、そのような着眼に着目するさぶりなど、みせないほうがよい。)

「言語研究会」は、正統「言語学」の体系を吸収するところから、歩みはじめた。(それゆえ、当初は「言語学研究会」と称していた。) それからのちは、おもむくに、言語学の周辺の話題や各自のオリジナルな報告の検討の機会をふやすよう変化してゆき、現在ならば、各自の研究報告にあらかたをあてている。この間、研究会の軌跡は、ある一巡をへて、メンバーを見知らぬ地点へと運んできたはずである。この地点から先では、各人に加速度的な夏風がかかってくるのは、目にみえている。

訂正

『月報11』とともにおとどけた、「論文題頭布リスト」中、つぎの誤りがありました:

CN74 月報10 羊30(誤) → 羊25(正)

請求金額等は、次回清算の折に修正させて下さい。あしからず。

ものごとがお勉強ですんでいるうちは、それでもいい。まだ学ぶべきことが残っているあいだは、学ぶことが必要だ。しかし、学ぶという自律的な修練は、本来、あるところで自律的な研鑽へと移行するためだけにある。人は、自分が学び終る地点を自分でみつけない限りならず、そこから先は、自分の仕事によって一足づつ歩むほかないことを、知らねばならない。人から知識をかすめとることに慣れきってしまつと、この移行点の所在すらわからなくなつてしまふ。(自分がまだ知らず、ど二かの誰かが知つてゐる)知識は、一見、十分に茫漠とした括りをもっている(かに思われる)、だから、自分で歩きはじめべきそのたびごとに、そうするかゆりに、くりかえしくりがえし知識の畝のなかに自分の履をもぐりこませていつて、一生を終つることなど造作もない。ゆれゆれの近代は、そうした犬コロのようなモカニストばかりをうみだしてきたかのようだ。(そうであることをまぬかれることは、誰にとつても、至難の業である。)

それに加えて、たとえば「言語研究会」のような場合には、また特有の困難と危険がついてまわるように思われる。それは、こういうことだ。

既存の(社会学の)領域区分をいちおうそれとして認め、そのなかからひとつを専門分野としてえらびとるようにして自分の課題を設定することと、まだそういう区分の及んでいない場所、たとえば<言語>あたりに向かありやうだと目をつけることとでは、まったくその意味が異なる。既存の領域区分は、(ある時代の要請=制約のもとにおかれる、という)それ相応の理由があつて、そのような配置を実現しているのである。それは、ゆれゆれの社会によつてうみだされ、そこに埋めこまれ、それと不可分に合着している、といういみでは、十分に現実的である。現に学界の支配的な部分をなしてゐたり、また行政バースの仕事をこなしてゐたりするとは、そうしたことである。このような専門分野の仕事をはじめるときに、研究者はどのように自分の船をとればよいのか? —おそらく、ことさら思ひ悩むほどの余地もあるまい。そこには、多分それなりに、その分野の一端にたつようになるための、トレーニングシステムがとられてゐるのであるから。それらを順次になしてゆけば、既存の学的達成を基準としての公分的な知識なり技法なりは、手にできるはずである。こうしたときでも、最後に貴重であるのは、独創性であるだろうが、独

創がものをいうようになるまでに、ふまえておかなければならない準備が明瞭に控えている。(だからたとえ、ある研究者がまったく独創性を発揮しなかつたにしても、ともかくそれなりに専門家としてのかたちだけは、つくことになつてゐる。)

それに対して、たとえば<言語>のように、既存の領域区分のなかには位置づかないような視野、いわば未開の荒地のようなところに自己定位しようとする場合は、どうか? ある視野が手つかずに未開拓のまま残つてゐたとすれば、それにはまたそれなりの理由というものがあつて相違ない。そもそも二義的、三義的な事象にすぎない、とみなされてゐるのか、複雑すぎて従来の分析手法では歯が立たなかつたのか、あるいは単に、うかつにも見おとされてきたのか、……、いずれであるにせよ、そこには、既存の研究による学的達成の蓄積も、研究の方向づけも、欠落してゐる。したがつて、そこでは、ただちに独創性をもとめられる。風吹きすまぶ無人の荒野には、研究作業を行う既存のディマソリンがあるゆへではないからだ。作業からよい結果がえられず、ついに研究が根づかなかつたとすれば、そこはもとどおりの荒野に帰すであらう。研究者のうるものは、何もなし。未踏の地で自己の首眼を成就するとは、この上もなくきびしい途であることを、併に銘すべきである。

ところでその一太、つぎのようなことも考えておくべきだ:<言語>のような、既存の学的達成からみて周辺的であるような視野では、研究上のハマカキわめてバシにくくなつてゐる。もともと何を言おうと、定数に抵触しないため、文句を言ひない(、あるいは、相手にされない)、という事情もある。また、その視野でいくつかの作業があり、相互に批判しあつたとしても、それに決着をつけるような客観的な規準がみつからない、という事情もある。そこでは、独創性をたぬに、誰もが生きのびていくかにみえる、しかし、それは、本当は、オオカミが来るまでのあいだ道草を喰ひまわつてゐるだけの迷つたヒツジの群れにすぎないのかもしれないのだ。そこに蔓延するタイアの病理態を誇張して描くとすれば、つぎのようになる——正統な基礎訓練(ディマソリン)をたえしのぶかゆりに、その綱目から外へ逃げだし、安直で無定数の問題意識のまわりを望みめぐりする、自堕落な知性の吹きだまり…… 果たして、事態をこのように視ないけれども、自分らがいつてもたちまちそのような許す

べからざる状態へと転落しうることを思い知っておくのは、重要だ。

人は、研究者として、あるときつぎのような選択の前に立たされるのではないだろうか——ひとつは、現存の学的秩序をもたらし既存の達成を承認し、その1分野のなかで、自分の仕事を既存の達成のむこう側へと継ぎたしていこうとする仕方、そしてもうひとつは、現存の学的秩序に収まりきれない何かしら自分独自の着眼にあえてこだわり、そこから自分の仕事を始めようとする仕方。このちがいは、(意思的な)選択というより以前に、もっと自体的な、たとえば資質や性向とよぶべき一連の分岐であるのかもしれない。要するに、現存する学的秩序に、異質なし反撥をどうしようもなく覚えるか否か、というちがひである。(だから、これは、ほんのみかけはかりの差異である。ともに、独自の作業への長い道のりの入口である、という点では、共通しているのではないか。)

この分岐は、人をどこへつれてゆくか? その行き先のひとつが、「言語研究会」でありたいだろう。そのようにしてはじまる最大の困難とは、(正統づけられた)ディシプリンの欠在である。といゆえ、みのある独自にいたるためには、このディシプリンの欠在を埋めあわせて余りあるだけのしたたかな自己論理の発動がまさに要請されている、とわたしは思う。

研究者の自己論理とは何だろうか? それは、研究者が自身の作業を秩序づけていくための、規準としてはたらく。人は、もしある着眼にみまわれたことを自覚したなら、その着眼を外らさずに全うするための、正当化の作業に邁進する以外にない。着眼は、それ自体としては、ただ感性のありかたのようなもので、別段どうというほどのものでない、丁度、問題意識などありふれているように。ある着眼が全うされるときは、だから、その着眼から一連の仮説的な着想が生まれ、それがやがてひとつのまとまり——立場——にまで収斂し、しかるのちその立場が弁証されたとき、なのである。人は、着眼に安住することなく、そこにひらめき (aha thinking) を思加させて、ひとつの立場にまで成長させねばならない。

立場とは仮説系であるから、まづ自己の疑念にさらされる。研究者の自己論理は、自己の立場を明確にし、それを保持しようとするあくなき意志にある。この自己論理を貫くことにくらべれば、社会的な倫理性など二の次のことであ

る。さらに、自分の立場を鍛え磨きあげてゆくには、ぶたつの契機が欠かざまい——ひとつは、関連する段序の学的達成と、徹底してゆたりあうこと、そしてもうひとつは、形成途上にある類同の諸々の立場と対決すること。複数の立場をたまたかゆせることのなかから、創造的な活力を再生産してゆくこと、これがたぶん、研究者の集合形態としては最善だと思う、また「言語研究会」にあっては。

もっとまわった言い方になったところもあり、また言いたくないところもあるが、わたしは単純に、"お互い、精一杯やろうじゃないか"と言いたかっただけだ。

**

前号以来、あらたにコピーできる状態になったものは、以下の通りである:

- CN76 「論としての貨幣(抄)」, (『ソシオロギス』3: 近刊)
- CN77 「<言語>派行動論の基本構図(1)」, (『止揚』30: 20-29.)
- CN93 「位相空間論(2)」 ¥65
- CN92 「位相空間論(3)」 ¥45
- CN91 「位相空間論(論)」 ¥10
- CN90 「論評: 山本泰「規範の核心としての言語——沈黙論の試み——(MS#2) (1979)」 ¥70

CN76, 77 は、11おれもできいばもとの雑誌をござらんいただきます。(『止揚』30号は、B5 版30頁を430円です、取扱中。) CN93~91 は、小室ゼミナール春季講座のために用意したレジュメ。CN90は、山本泰氏の最新論文を論評したもの、これは、やはり『ソシオロギス』3号で発表されるはずだが、わたしが対象としたのはその草稿(MS#2)であったため、テキストに異同を生じたはずである。承知ゆびたい。

HASHIZUME, Daisaburo : 5-9-11 Zaimokuza Kamakura Kanagawa JAPAN

Phone 0467-22-1030

YOKOHAMA 51782

CN 78 ¥15.-